

建学の精神に基づく大学改革

大きく変わる大学の姿 改革の背景を知る

昨年度、大学進学率はついに50%を超えた。30年前は4人に1人だった大学進学者は徐々に増え続け、1996年には大学進学者が高卒就職者数を超えた。92年にピークに達した入学競争率は人口減少と相まって下降を続けている。

進学率の変化は大学に変容を促すひとつの原因なのは間違いない。同時に、経済構造や家庭の価値観の変化、社会における知のあり方や、社会人に求められる能力の変化も、大学に改革を迫る背景となっている。いま、大学の中身はダイナミックに動いており、進路選択をする際には、かつてのイメージにはもう頼れなくなっていると言えるだろう。

大学改革を導いてきた文部科学省の指針のいくつかから、大学改革の背景を探つてゆこう。

規制緩和、大学独自の 努力が求められる時代へ

90年代に様々な分野で規制緩和が進んだことは記憶に新しいのではないだろうか。大学も例外ではなく、個性化を推進し、大学独自の努力と行政による事後確認を軸とする方針に変わったのが90年代だ。

先鞭をつけたのが、91年2月に文部科学省の審議会から出された答申「大学教育の改善について」。これをうけて、その年のうちに大学設置基準が改正された。事細かに決まっていた大学の組織やカリキュラム、教育方法などを、最低限のルールに則つて自由に編成できるようにしたのが特徴だ。

例えば改正以前は「一般教養課程（いわゆる「パンキョー」と呼ばれていたもの）」と、専門科目は区別され、

科目区分や取得単位数などは全国一律で決められていた。それが自由にカリキュラムを組むことができるようになった。

これにより、国立大学の「一般教養課程や教養部はその後の5年間でほとんど姿を消し、1、2年次から専門科目を学ぶカリキュラム改革を行った大学が多くあらわれた。また、「経済学」「工学」などの従来の枠組みとは違う名称の付いた新しい学部が次々と誕生したのも91年以降だ。

しかし、この結果については98年の「21世紀の大学像(答申)」によって一部が見直された。そもそも、各大学が自由にカリキュラムを組むことで個性化が進み、さらに充実した教育内容になることを期待していたのが、結果的に研究重視・教育軽視の流れができてしまったという反省に立つもの

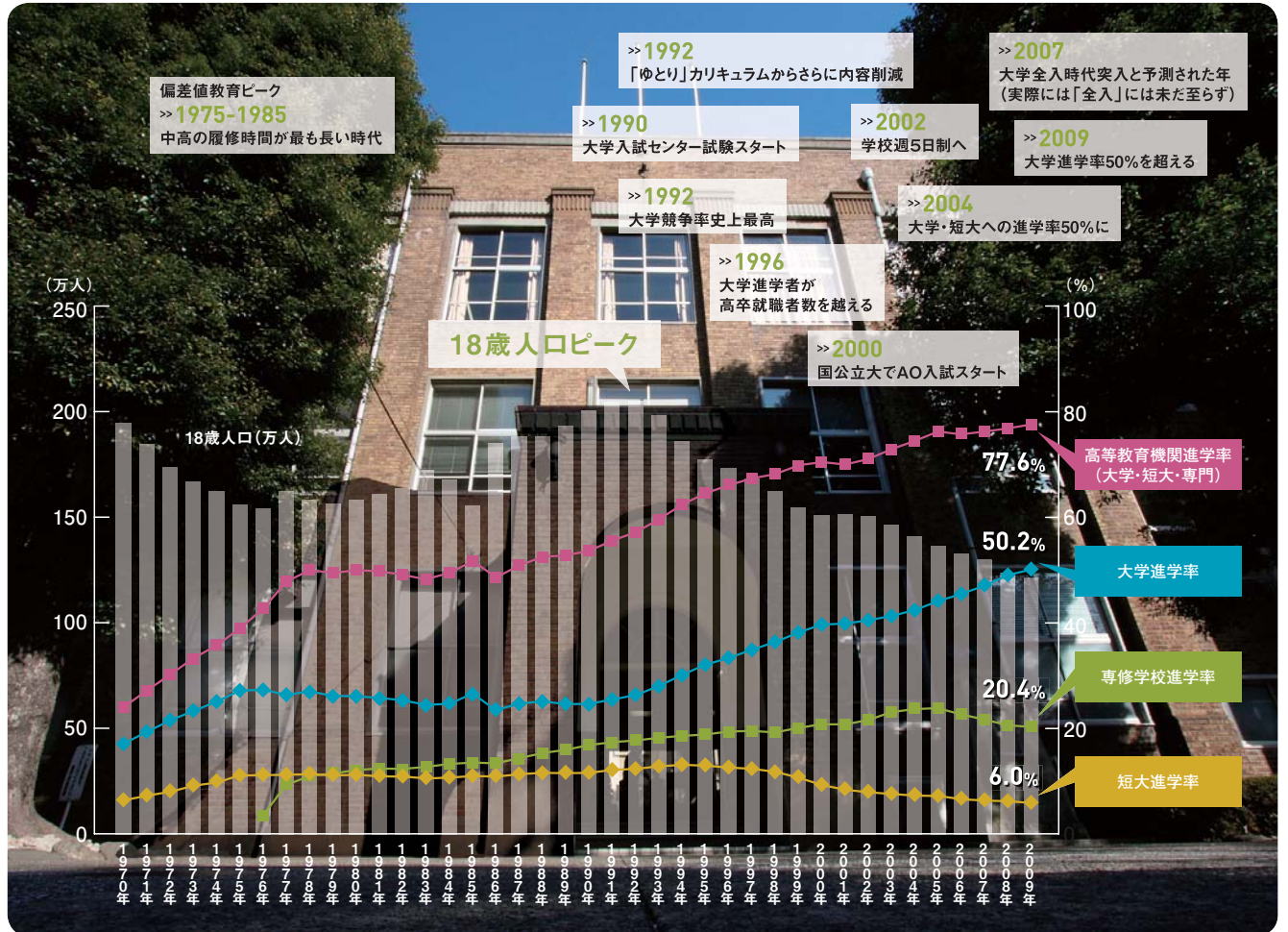
90年代以降の規制緩和の流れの中で、大学もまた自由化・個性化が進んでいる。かつての大学のイメージで大学をみると、その変容ぶりに驚くことも多いだろう。この特集では、行政の方針から大学改革の大きな流れを探ると同時に、各大学で進んでいる改革の具体例をみてゆきたい。

まとめ／編集部



各大学のホームページや大学案内を覗くと、改革施策の現れであるカリキュラム、学び方のスタイルなどが紹介されている。その源流にある建学の精神もチェックしたい。

図2 進学率の推移



グラフ出典：文部科学省「学校基本調査」ほかより編集部作成 / 写真：東邦大学医学部本館

で「高等教育は危機に瀕している」と冒頭で述べられている。4年間の教育を再構築することに加え、教養教育の重視、成績の厳格な管理、「教育者としての大学教員」をトレーニングするための方策がこの答申には盛り込まれた。

行政による計画と規制から、各大学へと改革の主体を移行するため、補助金も学生数に応じた一律のものではなく、各大学の特色あるプログラムごとに出す方向に転換された。最近の大学の広報物でよくみる「GP選定」という文言。これは、各大学が計画したプログラムをGP (グッドプラクティス選定) に応募し、選ばれると資金を獲得することができるという仕組みのことである。

つい先ごろ、08年に出された答申「学士課程教育の構築に向けて」では、学生の質や、大学の価値、職業社会の変化に触れ、卒業した学生の「質を保証すること」が大きくクローズアップされた。どういう学生を育てたいかというディプロマ(学位・ポリシー、学生を育てるためのカリキュラム・ポリシー、どんな学生に入ってきてもらいたい)かというアドミッション(入学・ポリシー)を明確にすべきという点が強調されている。大学のあるべき姿についての議論は今も続き、今後変わりゆく可能性がある。

改革の道標となるのは 建学の理念

大学全体の大きな流れがある中、各大学もまた、入学する学生の変化に向き合い、自らの使命を再確認しながら改革に取り組んでいる。変わるべき点と変えてはいけないものとはにか、立ち戻るの「建学の理念・精神」だ。以降のページでは、改革の具体例として2つの大学を紹介したい。

1校目の大阪産業大学は「偉大な平凡人たれ」という創業者の言葉を建学の理念としている。以前は生活の中で自然に育まれた社会人としての常識、基礎能力を育むことが難しい時代だけに「偉大な平凡人」を育てるか。学生達がチームでプロジェクトに取り組み中で、課題発見力やコミュニケーション能力を磨く「プロジェクト共育」に力を入れている。

一方、明海大学の理念は「社会性・創造性・合理性を身に付け、広く国際未来社会で活躍し得る有為な人材の育成」。この人材に必要な力を「明海の人間力」と再定義し、1年次から共通科目として「基礎教育」「人間力形成教育」「キャリア形成教育」の3本柱で育成するカリキュラムが今年、浦安キャンパスでスタートする。

これらの例を、変わりゆく大学の姿を知る参考にしていただきたい。